The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

元暁の理と事の概念に関する一考察

伊藤尚徳

一　元暁の『起信論』一心二門の解釈について

元暁（六一七―六八六）は『大乗起信論』所説の真如門と生滅門の一心二門を「理と事」の概念を用いて解釈している。この「理と事」の概念は、華厳教学の法界観を構成する理事無礙説、さらにそれを事々無礙へと展開させるための重要な概念であり、智儼（六〇二―六六八）によって初めて提唱されたものと言われている。(1) しかし、それを『起信論』の一心二門の解釈に用いたのは元暁が初めてであろう。

『大乗起信論』では、諸法の根源は一心と規定され、それは真妄和合であり、無明によって縁起する側面を生滅門とし、無明に影響されない真浄な心そのものは真如門として説明される。『楞伽経』の水と波の譬喩のように、二門は本来不二でありながら、無明の影響の有無によって、その現象としての在り方が区別される。

元暁は三大説、心識説などをもって、この二門が非一非異の関係にあることを解釈しているが、特に『大乗起信論別記』においては、「微塵」と、その集合によって形成される「瓦器」の譬喩を用いて二門の関係を示しており、そこに理と事の概念に関する記述が見られる。

何者眞如門。是諸法通相。通相外無別諸法。諸法皆爲通相所攝。如微塵是法。器通諸相。諸相外無別瓦器。瓦器皆爲微塵所攝。眞如門亦如是。生滅門者。即此眞如。是善不善因與緣和合。反作諸法。雖實反作諸法。而恒不壞眞性。故於此門亦攝眞如。如微塵性聚成瓦器。而常不失微塵性相。故瓦器門即攝微塵。生滅門亦如是。設使二門雖無別體。二門相乖不相通者。則應眞如門中攝理而不攝理事。生滅門中。攝事而不攝理。而今二門互相融通。際限無分。是故皆各通攝一切理事諸法。故言二門不相離故。(2)

すなわち、本来、真如門における通相としての「理」は、「事」を兼ね、生滅門の「事」は、常に「理」の本性を失わないので、この二門においては、理と事が際限なく相互に融通し合い、それぞれが理と事の諸法を摂するという。

そして元暁はこの「理と事の融通」に関して、唯識思想に

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

由来する三性説を以ってさらに解釈を施す。

何者眞如門中所攝事法。是分別性。以說諸法不生不滅本來寂靜但依妄念而有差別。故心生滅門所說事法。是依他性。以說諸法因緣和合有生滅故。然此二性雖復非一而亦不異。(3)

ここでは、「眞如門における事」を分別性とし、「生滅門における事」を依他性とし、三性説に基づいて、二門それぞれの「事」が相互に非一非異であることを証明している。そして、この解釈に次いで「真如門における理」と「生滅門における理」も同様の方法によってその関係が示される。

眞如門中所說理者。雖曰眞如亦不可得。而亦非無。有佛無佛。性相常住。無有變異。不可破壞。於此門中。假立眞如實際等名。如大品等諸般若經所說。生滅門內。所攝理者。雖復理體離生滅相。而亦不守常住之性。隨無明緣。流轉生死。雖實爲所染。而自性清淨。於此門中。假立佛性本覺等名。如涅槃華嚴經等所說。(4)今論所述。楞伽經等。通以二門。爲其宗體。然此二義。亦無有異。

ここで、真如門における理は、『般若経』などで説かれる、常住性を保ち、随縁も変異もしない「真如」「実際」たるものとされ、そして生滅門における理は『涅槃経』や『華厳経』で説かれる常住性を保持せず無明に随縁する「仏性」「本覚」たるものとされる。

しかし、意義として異なるこの二つの「理」は、元暁自身が別の段において(5)『起信論』の「経本」として定めている『楞伽経』の教理に准じて、異ならないことが説かれている。

このような三性説を根拠としながら理と事の融通を示す元暁の解釈は、華厳教学の影響を予想させるものがある。例えば、元暁と交流があったと伝えられる義湘（六二五―七〇二）は、『華厳一乗法界図』の中、因果不同の理を示す段において、一切即一、主伴具足を説き、次に三性三無性説を用いて理事の融通を開示し、理理相即、事事相即を言及して、最後に十玄門を説き、華厳教理こそが究極の別教一乗の教えであることを顕示している。

しかし、元暁の『大乗起信論別記』、或は『起信論疏』は、一心二門における理事融通を説くのみで、義湘が呈示するような華厳教理に言及する態度は見られない。したがって、元暁は当時、智儼や義湘の影響を受けずに、独自に理と事の概念を展開したようにも見受けられるのである。

次に、智儼に学び、義湘と同系の華厳思想を継承した法蔵（六四二―七一二）の理事概念を、元暁の解釈と比較し、その相違に関して気づいた点を述べることにする。

二　法蔵の理事概念との比較

法蔵は『起信論義記』において四宗の教判を示すが、その基準は各経典における理事概念の用い方の相違に求められる。

一隨相法執宗。即小乘諸部是也。二眞空無相宗。即般若等經。中觀等論所說是也。三唯識法相宗。即解深密等經。瑜伽等論所說是

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

也。四如來藏緣起宗。即楞伽密嚴等經。起信寶性等論所說是也。此四之中。初則隨事執相說。二則會事顯理說。三則依理起事差別說。四則理事融通無礙說。以此宗中許如來藏隨緣成阿賴耶識。此則理徹於事也。亦許依他緣起無性同如。此則事徹於理也。[6]

ここで法蔵は『楞伽経』や『起信論』に相当する如来蔵縁起宗に関して、如来蔵が随縁することによって阿賴耶識を成ずるという在り方を、「理が事に徹する」と述べ、三性説における依他の無性を説いて、そのことを「事が理に徹する」と表現する。また、『大乘法界無差別論疏』において、そのような事態を「理事交徹」という術語によって示している。

謂此宗許如來藏隨緣成阿賴耶識。即理徹於事也。許依他緣起無性同如。即事徹於理也。以理事交徹。空有俱融。雙離二邊故云也。[7]

では、この「理事の交徹」とはどのような状態をいうのであろうか。「交徹」の概念について言えば、法蔵の数多い著作の中には、「真妄交徹」、「動静交徹」、「理智交徹」といった使用例も見られ、「交徹」の概念は「理と事」だけに限定されていないようである。

例えば、法蔵の著した『入楞伽心玄義』はそれ自体、如来蔵縁起宗と見做され、大乘終教に位置づけられる『入楞伽経』の注釈ではあるが、この中、真と俗の関係を相違義・相害義・相順義・相成義・無礙義の五つの観点から説いている。

三相順者。謂此盡俗之眞要不礙俗立。以眞非斷空故。此覆眞之俗要不礙眞顯。以俗是虛幻故。如盡波之水必不礙波。以水非木石故。動水之波要不隱水。以波虛無體故。若不爾者各乖本位。二諦不成。上是非一之非異門也。四相成者。非直相順纔不相違。亦乃全體相與方各得成。謂眞是理實故必不違緣。擧體隨隱而成俗。以俗是事虛故必不乖理。擧體相盡而顯眞。如虛波攬水成。水徹於波相則無波而非水。成波乃名水。則波徹於水體。無水而非波。動靜交徹二諦雙立。若不爾者理事不融。二諦俱壞。此非異門也。[8]

以上は第三相順義と第四相成義について説いている段であるが、『楞伽経』の水と波の譬喩によって真俗の関係が明かされる。相順義においては、水は波として現れなくとも、波と成る本性を有している。したがって波そのものは実体を伴わないといえるが、水が現前している限りにおいて、そこに波の本性は現れている。表象は異なるが、本性としては異ならないという意義において「非一之非異門」であるという。

そして第四の相成義は、「非異門」を説いている。ここでは相順義で説かれるような表象の異なりが否定され、一つの事象の中に真俗が存立して異ならないことが説かれるのである。水が波相に徹し、波が水体に徹するという在り方は「動静交徹二諦双立」と表現される。ここでは対立する概念は一元的に集約されている。

法蔵は、この段の前弁として第一相違義で「真俗非一門」、第二相害義で「非異之非一門」を説いており、最後の第五の

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

無礙門においては、これまで説かれた相違義、相害義、相順義、相成義が円融し、同時に俱現するものとして一無礙法界を説示する。

五無礙者。合前四句所説。爲一無礙法界。是故即眞即俗即違即順即成即壞。圓融自在同時俱現。聖智所照無礙頓見。是謂二諦甚深之相。經意在此。故以爲宗。(9)

この無礙義は、法蔵自身が如来蔵縁起宗であるとした『楞伽経』の教義を華厳の法界観の地平へ昇華させている様子が窺われる。『楞伽経』の教理自体は一つの事象の中に、真と俗の在り方が「円融自在にして同時に俱現する」ということまで説いていない。また、法蔵は『起信論義記』においては、このような無礙門の解釈を呈示しないが、第四相成義と同様に、一心において理と事、真如と生滅が一元的に存立していることを「理事交徹」と説いているのだと思われる。

三　小結

元暁は理事説、三性説を根拠として、『起信論』の一心二門を解釈している。それは真如門の「事」と、生滅門の「事」の融通、そして真如門の「理」、生滅門の「理」の融通を示すものである。しかし、元暁には華厳思想を積極的に援用するような態度はみられない。また、元暁の解釈に従うならば、真如門中の理と事（真如実際と分別性）の融通、生滅門中の理と事（仏性本覚と依他性）の融通は説明できない。元暁は少なからず華厳思想の影響を受けているように窺われるが、当時の華厳教学を充分に理解する以前に『起信論』の注釈を著していたように見受けられる。

法蔵の『起信論義記』は、一心二門の解釈において理事交徹を説いている。すなわち、理事無礙を予想しつつ、華厳思想の法界観と関連づけて説くものである。この点において、元暁の理事概念は、法蔵とは明らかに異なっている。

1　木村清孝『東アジア仏教の基礎構造』春秋社、二〇〇一年。
2　『大乗起信論別記』大正四四、二二七中、十六行目。
3　『大乗起信論別記』大正四四、二二七下、九行目。
4　『大乗起信論別記』大正四四、二二七下、二二行目。
5　『大乗起信論別記』大正四四、二二七上、二一行目。
6　『大乗起信論義記』大正四四、二四三中、二三行目。
7　『大乗法界無差別論疏』大正四四、六一下、二二行目。
8　『入楞伽心玄義』大正三九、四二八下、二五行目。
9　『入楞伽心玄義』大正三九、四二九上、八行目。

〈キーワード〉元暁、法蔵、『起信論』、真如、三性説、理事無礙

（国際仏教学大学院大学）

NII-Electronic Library Service